

〈原著〉

フランシス・ベーコンの“生と死の話”とクリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラントの“マクロバイオティック”における長生法の相違

藤 井 義 博 (藤女子大学人間生活学部食物栄養学科・藤女子大学大学院人間生活学研究科食物栄養学専攻)

本研究は、英国の哲学者フランシス・ベーコン (1561-1626) の「生と死の話」(Historia Vitae et Mortis) とドイツ人医師クリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラント (1762-1836) の「長生法」(Art of Prolonging Life: Macrobiotic) の内容の比較に基づき、両者の長生法の相違を明らかにする試みであった。ベーコンとフーフェラントの長生法はともに、長生きだけを目的とした長寿の達成法ではなかった。前者においては人生のなすべき役目の達成を妨げてはいけないものであり、後者においては健康長寿の達成のための尽力により人間的完成をも実現するものであった。ベーコンによる長生法研究の動機は、中途半端な自然観察から得られたために何にも導かない従来の方法論を刷新して、アウトカムを導く方法論により長生を実現することであった。その方法論は、推論を交えない自然の観察だけからの帰納により一般原則を導き、そこから集約された3つの意図 (intentions、処置計画) を10のオペレーション (operations、術) に展開することからなる。ベーコンのスピリットすなわち無生物スピリット (the non-living spirits) と生物スピリット (the vital sirit) は、物体や身体の内側に存在して、物体や身体に内的価値を与える物として、長生法の意図に基づくオペレーションの展開において人による操作の対象になるものであることから、自然の観察から帰納された一般的原則であることが示唆される。一方、フーフェラントの生命力 (the vital power) は、内的価値の欠如する身体構成要素に生命という内的価値を付加する身体外からの作用因である。この生命力は、原則に基づくオペレーションの展開において人による操作の対象にならないものであることから、自然の観察から帰納された一般的原則というよりもむしろ宗教的直感 (religious intuition) であることが示唆される。このように人による操作の対象にならない生命力に基づくフーフェラントの長生法は、客観的な科学として発展することが困難であった。

もし宗教的直感に基づきつつしかも自然の観察だけからの帰納により長生法の一般的原則を導くための方法があるならば、それはベーコンの物 (matter) および身体のように、内在的価値を有する物 (matter) および身体からの主体的自然観察であるように思われる。その場合、内在的価値を有する物 (matter) および身体が配慮する自然の観察という方法になる。このような自然の観察から帰納される一般的原則は、ベーコンのスピリットのように意図に基づくオペレーションの構成要素になることで、客観的な科学として発展し得る長生法をもたらすことが期待される。

キーワード：消耗、修復、刷新、スピリット、生命力

1. はじめに

若い医師のために臨床指針となることを目的として、あらゆる仮説を脱ぎ去り、半世紀にわたる自らの臨床医学実践の経験を集大成した大著「医学必携」を

後世に遺し、西洋近代医学草創期に活躍したドイツ人医師クリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラント (1762-1836) は、34歳のときに一般人のために著作「人が長生きするための技法」(1795) を刊行した。これは出版直後から好評を得て版を重ねあらゆるヨーロッパ語に

翻訳され、その第3版からは書名が「マクロビオティック人が長生きするための技法」となり、19世紀の大ベストセラーとして彼の死後も出版され続けた¹⁾。

フーフエラントによる長生法の着想は、英国の哲学者フランシス・ベーコン (1561-1626) の著作「生と死の話」(Historia Vitae et Mortis) の影響を受けている。とりわけいのちを周囲環境によって不断に消耗してゆく炎すなわち life as a flame と把握するベーコンの着想に感銘を受けている²⁾。さらにフーフエラントは、生命力という一つの原理のもとに医学分野を初めて集約する統合的医学を提唱し、また生命力の働きを礎とする長生法を創設した。そして生命力という着想を古代ギリシアのヒポクラテス派の医師がその医術の礎とした大自然 (Nature) と等価とみなすことにより、長生法と医学をヒポクラテス派の医術との関連において位置づけた²⁾。本研究は、ベーコンの「生と死の話」とフーフエラントの「マクロビオティック」の比較に基づき、両者の長生法の相違を明らかにする試みであった。

2. 資料と方法

フランシス・ベーコンの「生と死の話」(Historia Vitae et Mortis) のテキストとして、THE OXFORD FRANCIS BACON・XII (Director: Graham Rees, Oxford University Press, Oxford, UK, 2007.) を用いた。これはラテン語の原文と対訳の英語訳からなる。そして引用をするときは、(HVM) で示しかつ続けて引用ページないしは引用する規範 (rule) の番号を示した。クリストフ・ヴィルヘルム・フーフエラントの長生法のテキストとして、「人が長生きするための技法」(Die Kunst, das menschliche Leben zu verlängern) の英訳本：Hufeland's Art of Prolonging Life. (Edited by E. Wilson, Boston, Ticknor, Reed, and Fields, 1854) の復刻本 (Bibliolife, Charleston, SC.) を用いた。「人が長生きするための技法」からの引用は全て英訳本から行い、引用をするときは、(Art) で示しかつ続けて引用ページを示した。フーフエラントの臨床医学のテキストとして、「医学必携」(Enchiridion medicum, oder Anleitung zur medizinischen Praxis, Vermachtnis einer funfzigjahren Erfahrung) 第6版の英訳本 Enchiridion Medicum, Or, the Practice of Medicine, The Result of Fifty Years' Experience. (William Radde, NY. 1855) の復刻本 (Lightning Source UK, Milton Keynes, UK. 2010) を用いた。「医学必携」よりの引用をするときは、(EM) で示しかつ続けて引用ページを示した。

3. ベーコンの「生と死の話」とフーフエラントの「長生法」の構成の比較

(1) ベーコンの「生と死の話」の構成

ベーコンの「生と死の話」は、前半と後半の2部からなる。前半は、無生物の永続、植物の寿命、寿命の敵である乾燥について、動物の寿命の長短、栄養と栄養供給法、人の寿命の長短、長寿の症例、長寿の相關物、長寿の医薬、長寿の実際的手順および手段、死の前室、若年と老年の相違についての記述を含む。後半は、全32の長生と死の形態に関する規範 (rules) の表明とそれぞれの解説である。最初の16の規範と解説は、スピリットの性質と作用を扱う。後半の16の規範と解説は、長生との関連事項、体液、同化、栄養、刷新、軟化、冷却、生物スピリットを扱う。このようにベーコンの「生と死の話」の前半は、長生法の視点における内容の表明であり、後半の32の規範とその解説は自然の観察から帰納されたスピリットの着想を中心とする一般的原則の表明である。この全32の規範の表明と解説という形式は、後述するように、中途半端な自然観察から得られたために何をも導かない従来の老化理論を刷新するというベーコンの長生法研究の動機と関連して、推論を交えない自然の観察だけから帰納された着想および一般的法則から長生法を眺めるためであると思われる。

(2) フーフエラントの「長生法」の構成

フーフエラントの「長生法」は、パート1. 長生法の全般的吟味、パート2. 短命の手段、パート3. 長寿の手段の3部からなる。パート1は、ベーコンを含む長寿法の歴史、生命力の性質、植物・動物・人間の寿命、生存期間を定めるもの、人間における精神的完成の長寿への影響、個人の長生の原因と徴候、新しい長生法の吟味と唯一可能でふさわしい方法の決定を含む。パート2. は、繊細な幼児保育、青年の身体活動過剰、精神的能力の酷使、疾病、不純空気、飲食では過飲食・手の込んだ調理・スピリット (訳者注：アルコール)、不活動、感染症、老化、短命をもたらす情念、想像力過多、死の恐怖を含む。パート3は、遺伝的家系、合理的な身体教育、活発で勤勉な青年、青年期の性的禁欲、幸せな結婚状態、睡眠、身体運動、自由空気の喜びと適温、田舎の生活、旅行、清潔・スキンケア、正しい食物・飲食の中庸・歯の保持、心の静寂・満足・愉快、性格の現実性、中庸の感知、疾病予防・疾病の賢明な対処・薬と医師の正しい使用、突然死の危険に暴露された時の救助法、老年の正しい対処、精神力と身体力の修養を含む。このようにフーフエラント

トの「長生法」は、人間の長寿法の歴史から始まり、植物と動物そして人の長寿の検討を経て、幼児期から老年期に至るまで人の長寿のための具体的方策を含む。しかもその方策は、身体の保持のみならず精神の保持、結婚の意義や精神的修養など幅広く人間の文化に渡っている。フーフエラントの「長生法」の多彩な内容は、後述するように、人々の生命力の欠如の回復という彼の長生法の動機と関連して、生活の各場面における具体的な言及を含むことによる。

(3) ベーコンの帰納的な科学の方法とフーフエラント
フーフエラントがベーコンの「生と死の話」から採用したことのひとつは、自然の観察から一般法則に至る帰納的な科学の方法である。フーフエラントは、この方法とその意義について、「偉大なベーコン、彼の天才は科学のあらゆる分野を包括し、長く錯誤のなかで迷ってきた人の精神、それを真実に連れ戻す道を初めて指摘した。」と述べる (Art 17)。

西洋伝統医学の臨床内科医として患者を診療するフーフエラントにとっては、個々の患者の正確な観察は診療の必要条件であった。そして個々の観察結果に基づいて治療法が決定されて個々の患者に適応された。なぜならフーフエラントが臨床実践していた西洋伝統医学は、病気という邪悪を可及的早期に排除ないしは予防するために、患者の身体の現状とその諸変化に応じて施術されるものであったからである。西洋伝統医学の医学知は、万人向けの啓蒙主義的理を礎とするものではなく、しかも公共における批判能力の外にある知であり、医学専門職のみに属する臨床観察経験の知であり、経験未熟な若い医師の能力の外知であった³⁾。それは、「患者は手段ではなく、常に彼は目的であり、彼は自然的実験やアートの客体ではなく、人間すなわち自然自身の至高の領域である」(EM 3)とする患者中心の医学知であった。さらに「医学においてはわずかの状況が物事の状態とその意味の変化をきたす。その場に居合わせて全個別状況を知らない限り、他の医師の医学治療を判定することは全く不可能である (EM 16)」という客観性を問えない医学知であった。

一方、フーフエラントの長生法は、患者のみならず一般人をも対象とするだけでなく、自然の観察から一般原則に至る帰納的な科学の方法を用いることにより、一般原則として適用され得るものである²⁾。このようにフーフエラントは、観察から一般的な原則に至る帰納的な科学の方法を医術ではなく長生法に適用しようとした。

(4) 生命を炎と把握する着想

フーフエラントがベーコンから採用したもうひとつは、生命を炎と把握する着想であった。長生に関して第一に必要なことは、疑いなく生命の自然とりわけ生命力、すべての生命の偉大な原因をよりよく知ることではなければならない。それゆえに、かの聖なる炎の内的自然をより正確に研究し、それが何により滋養され、何により弱められるかを発見することが可能ではないだろうかと述べる (Art 22)。フーフエラントは、ベーコンのこの主題 (長生法) についての着想は、大胆で斬新であると述べる (Art 17)。ベーコンは生命を周囲の環境により不断に消耗され続ける炎と考えた。いかなる身体、もっとも堅固なものでさえ、この不断の蒸発により分解され、破壊される。以上がフーフエラントによるベーコンの炎の解説である。しかしこの説明は、抽象的であり不明瞭である。なぜならベーコンは、身体に内在する物であるスピリットにより生命を説明しているからである。このスピリットに言及しないことは、ベーコンの意図を十分に表現しないことになる。上述したようにフーフエラントは、生命力をよりよく知ることにより、かの聖なる炎の内的自然をより正確に研究し、長生法の方策が発見できるのではないかと述べている。この比較法を用いた表現には、生命力と比較する対象は示されていないが、ベーコンのスピリットがその対象であると思われる。つまりスピリットをよりよく知るよりも生命力をよく知る方が、かの聖なる炎の内的自然をより正確に研究し、長生法の方策が発見できるのではないかという意味と思われる。なぜなら、後述するように、ベーコンの2種類のスピリットのうちの生命体のみ内在的に存在するとベーコンが述べる生物スピリットは、すべての生命の原因とみなすことができるからである。この意味においてベーコンによる物に内在する物としてのスピリットと、フーフエラントによる身体に受容される外部由来の生命力は、両者の性質とその由来において真っ向から対立している。これが、ベーコンのスピリットに関してフーフエラントが終始沈黙した第一の理由と思われる。フーフエラントは、スピリットの代わりに生命力をもって長生法の構築を考えたのである。それではベーコンのスピリットとはどのようなものなのか、次章に述べる。

4. ベーコンによるスピリットの着想

ベーコンは、無生物スピリット (the non-living spirits) と生物スピリット (the vital spirit) という2種類のスピリットの存在を表明する。この2種類のスピ

リットはともに物 (matter) である。そのうち無生物スピリットは、石などの有形物質 (tangible substance) すべてにおいて、粗野な物体 (the grosser body) のなかに潜み、取り囲まれて存在していて、有形物質の消耗と分解を将来する (HVM 規範 2)。一方、動物や人のような生命体 (living things) すべてにおいては、無生物スピリットのほかに生物スピリットがさらに加わっている (HVM 規範 4)。このように人の身体にはスピリット (無生物スピリット、生物スピリット) と身体部分 (parts) が存在し (規範 25 の解説)、このうちスピリットは身体に起きるすべてを行う職人であり労働者 (the craftsmen and workers) である (HVM 245)。身体部分の構造 (the structure of the parts) はスピリットの手段 (the instrument) である (HVM 規範 31 の解説)。人の自然の行動は個別の身体部分 (the particular parts) に属するが、生物スピリットがそれらを興奮させて刺激する (HVM 規範 5)。そして生物スピリットは無生物スピリットを抑制するが、最終的には無生物スピリットが優勢となりその宿主を破壊する。 (HVM xlviiii)。

5. ベーコンは生命を炎と考えたとするフーフエラントの主張の妥当性

ベーコンは、無生物スピリットは、ほぼ空気と共物質 (consubstantial to air) であり、生物スピリットは炎の物質 (the substance of flame) に近いと表明する (HVM 規範 6)。この表明は、ベーコンにおける生命と炎の関係は、生物スピリットと炎の物質との関係であることおよび生物スピリットは炎の物質に近いが、炎と同一ではないことを示している。それゆえにベーコンが生命を炎と考えたというフーフエラントの主張は、誤りではないが、不正確な表現である。さらに規範 32 において生物スピリットと炎の関係は、「炎ははかない物質である。空気は永遠である。動物の生物スピリットはこれら両者の間に位置する原則である」と表明される。そしてベーコンは、この規範の解説において、「スピリットは、空気からその気楽で繊細な刻印と受容を得て、炎からその高貴で力強い運動と行動容量を得る。生物スピリットの寿命は、折衷物である。なぜならそれは炎のようにはかなくはないが、空気のように永遠ではないからである。」と説明する。そうするとベーコンは生命を炎と考えたとするフーフエラントの主張は、炎からその高貴で力強い運動と行動容量を得るスピリットとりわけ生物スピリットの活動を生命現象とみなした表現であるということが出来る。

6. ベーコンの生物スピリットとフーフエラントの生命力の比較

(1) ベーコンの生物スピリット

ベーコンの生物スピリットは、身体の内在的な作用因であり、身体において臓器生理学的に同定され得るものである。生物スピリットは、自然の行動 (吸引、保持、消化、同化、分泌、感覚自身など) をそそり、刺激して、個別の身体部分においてそれらを実現するものである (HVM 規範 5)。そして、自然の行動のどれひとつとして生物スピリットの熱に加えて生物スピリットの力と存在がないならば、発火されることがない (HVM 規範 5 の解説)。生物スピリットは、身体の器官にめぐらされて存在する神経系の観察からの着想であると思われる。

(2) フーフエラントの生命力

フーフエラントにとって、生命力は、大自然の最も繊細で、最も透過的で、最も目に見えない作用因 (agent) であり、光、電気、磁力と親和性を有するもののそれらを超える原則である (Art 26)。またフーフエラントは、前述したように、生命力を古代ギリシアのヒポクラテス派の医師がその医術の礎とした大自然 (Nature) と等価とみなし、自身の医学と長生法を古代ギリシアのヒポクラテス派の医学の伝統の中に位置づける。フーフエラントのこの生命力は、身体構成要素と結合することにより身体構成要素に生命を付与する外来の作用因である。

(3) 内的価値の付与と生命力、スピリットの関係

生命力は、生命という内的価値のない身体構成要素に、生命という内的価値を付加する身体外の環境に由来する作用因である。一方、ベーコンのスピリット (無生物スピリットと生物スピリット) は、物体や身体内部に存在して、物体や身体に内的価値をもたらす物と把握される。物体の場合には無生物スピリットは、外界に対する配慮の主体という意味において物体に、内的価値をもたらす主体である。身体の場合には、無生物スピリットと生物スピリットが内的価値 (この場合は生命) をもたらす主体である。

このようにフーフエラントの生命力は、内的価値のない身体構成要素に内的価値を付加する身体外の作用因であり、ベーコンのスピリットは、身体に内的価値をもたらす主体であるならば、生命力を中心とする長生法は、スピリットを内在する身体の高貴な長生法とはかなり相違することが予想される。それを検討するには、ベーコンによる身体の高貴な長生法のための意図 (inten-

tions、対処計画)とオペレーション(operations、術)のうちとりわけ意図を、フーフェラントによる長生法のための意図ないしはその等価物と比較する必要がある。

7. ベーコンによる長生法のための3つの意図

ベーコンは、3つの意図(intentions、処置計画)を10のオペレーション(operations、術)に展開することで、人の身体の長生法を実現しようとする。その3つの意図は、消耗の禁止(the prohibition of consumption)、修復の完遂(the accomplishing of repair)、老化現象の刷新(the renovation of what has grown old)である。意図は、ベーコンが医学的な意味で使っている言葉であり、治癒をもたらす手順の目的、目標を意味する。それゆえに意図は処置計画である。一方、オペレーションは、意図を達成するために設計された一連の手順、処置、ルーティーンである(HVM liv)。ベーコンは、彼の3つの意図が、物の核心に至り、従来の無益な騙されやすい作りごとからはかけ離れていることの確信を表明するとともに、後世に対しては、「私たちの継承者は、これらの意図を充足する事物に多くを付加できるが、意図自体には付加できないであろうと考える。」と述べることで、彼の3つの意図の客観性と普遍性への確信を示す(HVM 239)。

8. フーフェラントによる長生法のための4つのポイントにもとづく4つの原則

一方、フーフェラントは、いくつかの重要な演繹(deductions)が導かれるところの長生が依存している4つのポイントを挙げる。それは生命力の生得量(innate quantity of vital power)、器官の堅固性(firmness of its organs)、消耗(consumption)、回復(restoration)である(Art 40)。それらに基づいて、長生は4つの方法ないし原則(principles)により可能であると述べる(Art 139)。すなわち生命力自体を増すこと(increasing the vital power itself)、器官を堅固にすること(hardening the organs)、生命力の消耗を遅らせること(retarding vital consumption)、回復を促進し支援すること(facilitating and assisting restoration)である。そしてこれらの原則に基づいて長生法の計画と方策が帰結する。

このようにフーフェラントの原則(principles)は、ベーコンの意図(intentions)に対応するものであり、フーフェラントの長生法における4つの原則はベー

コンの長生法の3つの意図と等価であると判断される。それゆえにフーフェラントの長生法の4つの原則とベーコンの長生法における3つの意図を比較検討することにより、両者の長生法の相違についての検討ができる。しかしその前に、両者が長生を、生存期間の単なる延長である長寿からどのように区別をしているかについて比較して考察する。

9. ベーコンおよびフーフェラントにおける長生と長寿の区別

ベーコンとフーフェラントは、ともに長生法を長生きだけを目的とした長寿の達成法から明確に区別している。ベーコンは、3つの意図にもとづいてオペレーションを展開するに当たり、前もって人々に予め注意を促したいことがあるとして5つのことを表明している。このうちの長生法と単なる長寿の達成法の区別にかかわる2つを採りあげる。ひとつは、人生のなすべき義務は、純粋で単純な人生よりも重要である(HVM 241)との認識のもとに、人生のなすべき役目を放棄したり、遅らせたり、無効にすることを含まない救済策や規則を進めることである。もう一つは、無責任さを放棄して自然の力のある過程を緩やかにしたり、後戻りさせるような偉大な仕事(訳者注:長生法)は、朝の一杯や貴重な医薬の使用により完遂し得ると想像することをやめることである。このようにベーコンの長生法は、人生のなすべき役目の達成を妨げない救済策や規則からなる。このような長生の達成は、ベーコンの3つの意図が要求する10のオペレーションすべてを含むいわば厄介な仕事であった。

フーフェラントは、長生の4つの原則の用い方について、その中の1つが残りの3つのために犠牲にされてはいけないうことおよび単なる存在だけではなく仕事と楽しみと人の究極の目的からなる人生(the life of man)に関わる問題であることを忘れてはいけないうと述べる(Art 149-150)。このようにフーフェラントの長生法は、生命力の働きの基づく健康長寿の達成のみならず、そのための尽力により人間的完成をも実現するためのアートであった。

10. ベーコンの3つの意図とフーフェラントの4つの原則の比較

ベーコンの3つの意図とフーフェラントの4つの原則の比較検討から、結論として以下の4つの点が指摘できる。第一に、ベーコンの修復の完遂(the accomplishing of repair)は、フーフェラントの回復を促進し

支援すること (facilitating and assisting restoration) に継承されている。第二に、ペーコンの老化現象の刷新 (the renovation of what has grown old) は、フーフエラントには継承されていない。第三に、生命力自体を増すこと (increasing the vital power itself) および生命力の消耗を遅らせること (retarding vital consumption) は、ペーコンにはなく、フーフエラントに特異的である。第四に、ペーコンの消耗の禁止 (the prohibition of consumption) とフーフエラントの器官を堅固にすること (hardening the organs) は、表現は異なるものの、同様の内容を扱っている。これらの4点のうち、(1)ペーコンの老化現象の刷新、(2)フーフエラントの生命力自体を増すこと、(3)フーフエラントの生命力の消耗を遅らせること、そして(4)フーフエラントの器官を堅固にすることとペーコンの消耗の禁止の関係について以下に考察する。

(1) 老化現象の刷新

ペーコンは、刷新 (renovation) を「自然の力強い過程を……後戻りさせるような偉大な仕事」と呼び、老化現象の刷新は簡単に達成できることではないが、長生法により達成可能な目的と把握する。彼の視野にはスピリットの入れ替えによる刷新 (renovation) の達成という把握があり、「もしも老体に若い体に特徴的な種類のスピリットを入れ込めるなら、この強靱な車輪は弱い車輪を逆転させて自然の過程を後戻りさせるだろう。」と述べ (HVM 245)、大病が治癒した患者がその後長生きする現象は、治癒過程でこのようなスピリットの刷新が行われることだと解釈する。また彼は、うまく治癒した消耗疾患のあるものは長生することの理由を、古い体液が消耗され新しい体液が供給されることに帰する。そして「(人々がいうように) 健康を回復することは若さを回復することだ」と表明する。さらには、厳格で乏しい食事法がかえって長生をもたらすことも刷新によると考える。ペーコンは、これらの判断の結論として、「我々は、厳格で乏しい食事法によりなされるように、(いわば) 人工的な病気を引き起こすべきである。」と述べて、刷新をもたらす長生法はいわば人工的な病をもたらすことであると表明する (HVM 237)。ペーコンは、老化したものの刷新という意図を、「枯渇し始めた部分の柔軟化」と「古い体液の排除と新しい体液との交換」という2つのオペレーションに展開する。

フーフエラントは、renovation の表現を使用するものの、それは回復 (restoration)、再生 (regeneration) と同義として用いられている (Art 41, 139)。このようにフーフエラントは、「古い体液の排除と新しい体

液との交換というオペレーションに展開されるペーコンの老化現象の刷新という意図を採用しなかった。

フーフエラントが、老化現象の刷新を長生法の原則として採用しなかった理由は、彼の長生法が器官に対する外来の生命力の働きに基づいていることに由来すると思われる。彼の長生法は、一方では生命力の働きを増すこととその消耗を遅らせることであり、他方では生命力を吸収し、受容し、充当できるように臓器をよい状態に維持することである。自然の力強い過程を後戻りさせることを刷新 (renovation) とすると、それは内的価値がない臓器による達成は不可能であろう。また生命力に働きかけて自身の自然の過程を後戻りさせることも不可能であろう。

またフーフエラントは、刷新をもたらす長生法はいわば人工的な病をもたらすことであるというペーコンの結論を支持しない。なぜならフーフエラントは、いわば人工的をもたらすことは長生法ではなく、伝統西洋医学の治療原理と考えたからである²⁾。伝統医学の3種類の代表的治療法、瀉血による脱血、阿片による心身の刺激、吐剤による催吐は、自然に将来した病気を追い出すために人工病という刺激を惹起すること以外の何物でもなかった。この治療法は、付加した人工病の効果がなければ、既に存在する病気に人工病がさらに付け加わるために病状が一層悪化し得る危険な治療法であるため、それが許されるのは、すでに存在する病気のどれだけの部分が治療手段に譲歩するかを十分な臨床観察により発見することができる者すなわち医師だけであるとフーフエラントは考えた。フーフエラントにとって、人工的な病をもたらすことは、一般人が実行すべき長生法ではなく、医師にのみ許される治療法であった。

(2) フーフエラントの生命力自体を増すこと

フーフエラントの生命力を増すことという原則は、生命力自体は人が操作的に働きかける対象ではないことを前提としている。フーフエラントは、生命力は、我々が摂取している滋養物や吸入している空気のように我々の近くに在って我々をとりまいている全ての物の中に満ちあふれていると述べる。そしてそれゆえに最終的に人をもはや生きることには不適切にするものは、得られる生命力の欠乏ではなく、我々の諸器官が生命力を吸収し、受容し、充当する能力の欠如であると説明する (Art 142)。生命力は、化学的構成物質間の化学反応を生命現象に変換する外来由来の作用因であることから、人ができることは、ただ生命力をどれだけ吸収し、受容し、充当し得るかである。フーフエラントは、前述したように、生命力を古代ギリシアの

ヒポクラテス派の医学者の Nature と等価とみなす。古代ギリシアでは Nature は、同時に統一的で、生成力があり、調和的で、神聖であった何かであり、ヒポクラテス派の医師もこの原則の例外ではなかった⁴⁾。ヒポクラテス派の医師が Nature を操作の対象としなかったように、フーフェラントにとって生命力は、人による操作の対象となるものではなかった。

(3) フーフェラントの生命力の消耗を遅らせること

フーフェラントは、生命力の消耗を遅らせることは、生命力の働き (vital operations) を支持する不断の精神的あるいは身体的な刺激と反応の中庸により達成されると考える。生命力の消耗を遅らせることは、生命力の働きを支持している不断の刺激と反応が過剰でないことで達成が可能である (Art 154)。生命力への刺激を増すものは、精神的なものであれ身体的なものであれ、生命力の消耗を促進するものに属すると考えるべきだと述べる (Art 156)。

(4) フーフェラントの器官を堅固にすることとベーコンの消耗の禁止の関係

フーフェラントは、消耗を生命力の消耗と器官の消耗の2つに分けて把握する。上述したように、フーフェラントは、生命力の消耗を遅らせることを長生法の原則として採用している。そして器官の消耗に関しては、器官の消耗されにくい性質を器官の堅固さと表現している。この器官を堅固にするという原則は、器官が消耗と破壊に耐えるためには堅固さが必要であるという意味に加えて、器官を堅固にし過ぎることは生命体を傷害するために避けないといけないという意味も含んでいる (Art 151)。

一方、ベーコンでは、器官の構造を堅固にすることは消耗を防ぐオペレーションであって、意図ではない。ベーコンは、堅固な構造の中のスピリットは、しぶしぶであっても保持されると述べる (HVM 規範 15)。そして器官の堅固な構造はスピリットを保持させるように働くために、食物の乾燥、運動、空気の冷却から得られる堅固な身体や丈夫な皮膚などの体液は、長生に役立つと説明する。このようにベーコンでは、器官の構造を堅固にすることは消耗を防ぐオペレーションであり、消耗の禁止が意図である。この消耗の禁止の意図は、4つのオペレーションに展開される。すなわち 1. スピリットがその力を回復することへのオペレーション (訳者注: 漢方の補剤など)、2. 空気の排除へのオペレーション (訳者注: 酸化の抑制など)、3. 血液とそれを作る熱へのオペレーション (訳者注: 代謝、熱中症、低体温など)、4. 身体の体液へのオペレ-

ション (訳者注: 脱水など) である。

11. 長生法の第1原則とベーコンのスピリット、フーフェラントの生命力の関係

ベーコンの意図は長生法の第1原則である。ベーコンのスピリットは、物や身体に内的価値を付与する主体であるものの、ベーコンは、スピリットを長生の意図として採用していない。ベーコンにおいては、スピリットは、オペレーションの構成要素として登場する。上述したように、意図は、物の核心に至り、無益な騙されやすい作りごとからはかけ離れているものであり、オペレーションは意図から展開される長生のための戦術である。つまり意図は、身体への全てのオペレーションの基となるという意味において長生法の前提となる第1原則である。身体はスピリット (無生物スピリットと生物スピリット) および身体部分からなる。しかし長生法の意図は、これらの身体構成部分をすべて包括する第1原則であることが要求されている。それゆえに意図の構成要素にスピリットを含めることができない。言い換えると内的価値であるスピリットを含む身体が、アウトカムとしてどのようになれば身体の長生につながるのか、それが意図である。ベーコンは意図の構成要素として、消耗、修復、刷新を挙げる。これらは長生法の前提となるものである。このようにベーコンの意図は、長生法が成り立つ第一原則であるならば、意図の概念の構成要素である消耗、修復、刷新は、オペレーションの到達目標であって、オペレーションの対象にはならないものである。消耗、修復、刷新は、意図の構成要素として、人による操作の対象にならないという意味において、長生法の第1原則である。

フーフェラントの4つの原則の構成要素である生命力、器官、堅固、消耗、回復は、人による操作の対象にならない第1原則と理解される。このうち器官、堅固が第1原則になるのは、生命力が第1原則であることに直接的に起因する。なぜならその生命力を吸収し、受容し、充当するのが器官であり、それらを可能にする資質が器官の堅固であるからである。このように生命力が人による操作の対象にならない第1原則となっていることがフーフェラントの長生法の特徴である。

以上の考察より次のことが示唆される。(1)ベーコンとフーフェラントの目指した長生法においては、消耗、修復 (回復) は人による操作の対象にならない第1原則として共通している。(2)ベーコンのスピリットは、第1原則ではないため、意図に基づくオペレーション

の展開において人による操作の対象になる。(3)フーフェラントの生命力は、(それゆえに器官、堅固もまた)第1原則であるため、原則に基づくオペレーションの展開において人による操作の対象にならない。(4)ベーコンのスピリットは、オペレーションの展開において人による操作の対象になることから、それが自然の観察から帰納された一般的原則であることを示唆する。(5)フーフェラントの生命力は、オペレーションの展開において人による操作の対象にならないことから、それが自然の観察から帰納された一般的原則というよりもむしろ宗教的直感 (religious intuition) であることが示唆される。

12. ベーコンとフーフェラントによる長生法研究の動機の比較

長生法の構築においてベーコンはスピリットを採用し、フーフェラントは生命力を採用した理由には、両者の長生法研究の動機の違いが関与している。

(1) ベーコンによる長生法研究の動機

ベーコンは「生と死の話」の序文において、病気によらない死、すなわち老年の崩壊と萎縮により引き起こされる死 (自然死) について医師たちが想定している原因論の思考は、無知で軽薄であると批判する。すなわち医師たちは、老年の崩壊と萎縮により引き起こされる死は、生命現象に不可欠な根本的体液 (radical moisture) や原初的体液 (primigenial moisture) というものが完全に修復されず、子どものときからでさえ然るべき修復に代わって一種の欠陥のある付着が起きて、時とともに悪化して最終的には全くの無に帰することによると想像した。しかしベーコンによると実際に生じていることは、我々の衰退の年月において、修復は一律に困難になるのではなく、つぎだらけになることである。そして容易に修復される部分が、修復の困難な部分と対をなしているために、容易に尽きてしまうのであると述べる (HVM 147)。

根源的体液や (フェルネルを反響する) 原初的体液の概念は、中世とルネサンスの哲学者と医師により受容され、古典以後の権威者の大半により喧伝され解釈され磨き上げられてきた西洋の優勢な伝統な考え方であった。その起源は古代ローマのガレノスの栄養的体液に関するアイデアに基づきそれを精緻化したアラビアのアヴィケンナの理論にさかのぼる (HVM lxv)。その理論によると、食物は、胃による消化と肝臓による消化という2つの消化をこうむる。胃は食物の栄養部分を糜粥に転換し、肝臓は糜粥を静脈血に転換する。

身体各部に送られた血液は、第3の消化により同化される。第3の消化の過程は、'二次的体液'を含む。この二次的体液は、血液、粘液体液、黒色胆汁、黄色胆汁からなる一次的体液と区別される体液であり、4つの栄養的体液からなる。その第1は、静脈末端から分泌される体液である。それは、組織の半栄養素あるいは組織が枯渇するならば潤す手段となる第2のロスと呼ばれる体液になる。ロス、さらに第3のカンビウムと呼ばれる粘性体液になる。カンビウムは、今度は固形組織あるいは第4の二次的体液である根本的体液になる。この根本的体液は、部分の連続性と統合を維持し、グルテンと呼ばれる。

根本的体液は、寿命を決定する。なぜならそれは、固定された一定量存在し、時間経過により枯渇してソウル (soul) の手段である自然の熱 (the natural heat) により消費されるためである。年とともに、この熱は根本的体液を消費するに従って減少する。それゆえ個人が高齢になるほど体質は冷たくかつ乾燥する。自然の熱は臓器がもはやロスやカンビウムを吸収できなくなるまで組織を乾燥させ根本的体液を消費する。根本的体液はある程度は補充が可能であるとはいえ、無際限に再生されることはない。消化過程に使える熱は減少する一方であるために体液が受けとる再生は次第に不完全になる。

このような根本的体液や原初的体液の概念をベーコンは2つの点において批判する。ひとつは、推論を交えない自然観察だけからの帰納により一般原則を得る自身の方法を念頭においての批判である。ベーコンは、人間は自然から少しのことを採りあげてその残りは作り事すると述べる⁵⁾が、これらの概念は、まさにそのやりかたで作られているからである。ベーコンが作り事だというのは、そのような体液は広がるだけで量的に増加できないにもかかわらず、小さい子どもと大きな大人の間のような体液量の大きな相違があるときにひとつの身体の中にそのような体液が存在すると信じることは困難であるからである⁵⁾。

この体液概念に対するベーコンのもうひとつの批判は、これらの概念が何をも導かないことにある。ベーコンは、人々が自然の熱 (the natural heat) や根本的体液 (radical moisture) や、炎熱的過ぎず粘液的過ぎない優秀な血液を生む食物や、スピリットの再点火や蘇生について語る時、このように話すこれらの人達が悪人ではなく、ただこれらのことが彼らをどこにも導かないだけであると本当に思うと述べる (HVM 239)。言い換えると、これらの概念は、意図を導かないので、また意図から展開されるオペレーションをもたらさないということである。なぜなら意図は、物の核心に至

り、無益な騙されやすい作りごとからはかけ離れているものであり、オペレーションは意図から展開される長生のための戦術であるからである。

根本的体液や原初的体液の概念を批判するベーコンは、自然の死 (natural death) の原因について自然の観察からどのような一般原則を着想したのか。それは、おとなしい炎のような、永遠に食べ物にする性質の身体のスピリットが、外部の空気—それはまた身体をしゃぶり枯渇させる—と共謀することで、最終的に身体の工房とその機構と手段を破壊して、それらが修復の仕事をできなくすることである (HVM 147-148)。このようにベーコンによる長生法の研究の動機は、従来の何のアウトカムをも導かない方法論を刷新して、アウトカムを導く方法論を樹立することであった。すなわち自然の観察だけからの帰納により一般原則を導き、それらを意図に集約し、そして意図をオペレーションに展開するという方法論に準拠して長生を実現することであった。

(2) フーフェラントによる長生法研究の動機

哲学者のベーコンと違って臨床医であるフーフェラントの長生法研究の動機は、憂鬱な現代に生きる人々の生命力の欠乏の回復に長生法が役に立つとの確信にあった。フーフェラントは現代を、「人類をかくも破壊する憂鬱な時代」(Art ix) と把握した。そして現代を不幸にも際立たせているあの悲惨と意気消沈を生み出しているのは、人々の生命力の欠如であると理解した (Art 25)。なぜならフーフェラントは、人生の価値と至福の感知 (sensation) は、いつも生命力の多寡にほぼ比例し、生命力の溢れることが、人間の高次の目標である行動 (action)、営為 (exertion)、人生の享受 (relishing life) をより大きくするという一般原則を得ていたからである。フーフェラントは、一般人に対する長生法こそが生命力欠如の回復に役立つとの思いが、最高の慰めを与え、臨床生活のかたわら長生法の研究に打ち込むよう促したと述べる。

フーフェラントは、また若者の自殺に言及する。若者の自殺は、今や、青春の真っ盛りにおいて、最高に好ましい状況において、人生の嫌悪と飽きだけで自己から存在を奪いたいという空恐ろしい抗いがたい欲求を刺激する病気 (a disease) になった (Art 178) と見立てる。なぜなら以前の若者の自殺は、人生の嫌悪と飽きだけで自らの命を絶つというものではなかったからである。生命感と生命歓喜の枯渇、活動と幸福の芽生えの死滅が、いのちほど味わいの欠けた不快で嫌悪すべきものはないものにしてしまい、圧迫する重荷となつたいのちを排除したいとの欲望に抗しきれなくな

ることの多くは、いのちの趣 (the seasoning of life) であるべき生命力の早発過ぎる浪費によると述べる (Art 178)。

またフーフェラントは、長生法の内容が若者とりわけ大学生になる前に教えられることが最も必要だと考えた。この意味においてフーフェラントは臨床医であり医学部において医師の養成に携わる教育者であるとともに、一般の人とりわけ若者の教育者でもあった。

13. おわりに—フーフェラントの身体論と機械論哲学との関係—

生命力を医学と長生法の中心に据えたフーフェラントは、臨床実践にも機械論が導入されていた当時の医学界にあつて、生命現象を機械論的に扱わなかった。17世紀にはアリストテレスの自然哲学が最終的に捨てられ、ルネ・デカルトを中心とする機械論哲学が伝統医学に浸透した。「当代全ヨーロッパの師表」と仰がれ18世紀の最も高名な医師であったヘルマン・ブールハーフェ (1668-1738) の臨床の礎は、機械論による自然哲学にあつた³⁾。フーフェラントはイエーナ教授時代 (1793年-1801年) に流行した生命現象を機械的に扱うブラウン主義医学を批判している¹⁾。

しかしながらフーフェラントは、当時そしてまた現代の多くの医師や科学者がそうであるように、物 (matter) の着想をベーコンのスピリットの着想ではなく、デカルトの心身二元論に負っている。デカルトの心身二元論は、身体と精神が独立した各個の物質であり、それぞれが必要な相互の関係から切り離されてそれ自身の固有の権利において存在するという仮定である。そしてデカルトの機械論による身体は、延長すなわち内在的価値のない物 (matter) からなる。言い換えるとデカルトによる物は、ベーコンによる物質としての無生物スピリットと粗野な物体からなる物ではない。それは、いわばベーコンの物から物としての無生物スピリットを差し引いた残りの粗野な物体 (内在的価値のない物質) だけからなる物である。またデカルトによる身体は、ベーコンによる物としてのスピリット (無生物スピリットと生物スピリット) とパーツからなる身体ではない。それは、いわばベーコンの身体から物としてのスピリット (無生物スピリットと生物スピリットの両者) を差し引いた残りの内在的価値のない身体部分だけからなる身体である。

フーフェラントによると身体の構成要素自体は、内在的価値のない物からなる。それゆえにそのような物からなる構成要素間の相互作用は、機械的な化学的な過程である。しかしこの過程を遂行する物質に生命力

(大自然の統合された諸力)が結合すると、この生命力は機械的な化学的世界から有機的生命世界へ変換する作用因として働く。そして生命力の結合が解かれると有機的生命世界は化学的世界に戻る²⁾。このようにフーフェラントは、内在的価値のない物質から構成される人の身体は、潜在的には機械的な化学的世界に属しているが、その身体構成物質が生命力と結合すると内在的価値を有する有機的生命世界すなわち生命現象に変換するとした。それゆえに人の身体の生命現象は機械論的に扱ってはいけないと把握した。しかしながら上述したように、この生命力は、原則に基づくオペレーションの展開において人による操作の対象にはならないものであり、それゆえに自然の観察から帰納された一般の原則というよりもむしろ宗教的直感 (religious intuition) と考えられるものである。生命力に基づくフーフェラントの長生法は、生命力が人による操作の対象にならないために、客観的な科学として発展することが困難であった。

もし宗教的直感に基づきつつ、しかも推論を交えないで自然の観察だけからの帰納により長生法の一般の原則を導く方法があるならば、それはベーコンの物 (matter) および身体のように、内在的価値を有する物 (matter) および身体が、それゆえに主体的に自然

を観察することであるように思われる。その場合、内在的価値を有する物 (matter) および身体が配慮する自然を主体的に観察するという方法になる。このような自然の観察から帰納される一般の原則は、ベーコンのスピリットのように意図に基づくオペレーションの構成要素になることで、客観的な科学として発展し得る長生法をもたらすことが期待される。

引用文献

- 1) 藤井義博. フーフェラントの医学と長生法が目指した主体—その現代医学における意義—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2014 ; 9 : pp.13-26.
- 2) 藤井義博. フーフェラントの長生法における精神力の位置—その現代の健康教育における意義—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2015 ; 10 : pp.33-44.
- 3) Thomas. H. Brown. The Transformation of German Academic Medicine, 1750-1820. Cambridge University Press; Cambridge: 1996.
- 4) Pedro Lain Entralgo, edited and translated by L. J. Rather and John M. Sharp. The Therapy of the Word in Classical Antiquity. Yale University Press; New Haven and London: 1970, P 145.
- 5) THE OXFORD FRANCIS BACON·VI General Editors: Graham Rees and Lisa Jardine. Oxford University Press, Oxford, UK, 1996, p271.

Difference in The Art of Prolonging Life between Francis Bacon's *Historia Vitae et Mortis* and Christoph Wilhelm Hufeland's *Macrobiotic*.

Yoshihiro FUJII

(Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Science, and
Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji
Women's University)